

## 5, 6 歳児における学習および運動能力に関する自己評価

### —性差および他者評価との関連—

小島 理恵子<sup>\*1</sup> 堀江 真由美<sup>\*1</sup> 飯田 忠行<sup>\*2</sup> 玉井 ふみ<sup>\*3</sup>

\*1 県立広島大学保健福祉学部コミュニケーション障害学科

\*2 県立広島大学保健福祉学部理学療法学科

\*3 発達支援ゆず

2020年8月25日受付

2020年12月21日受理

#### 抄 録

5, 6 歳児における学習および運動能力に関する自己評価について、性差を考慮しながら、他者評価との関連を検討した。その結果、学習面、運動面、総得点において性差は認められなかったが、下位項目では、自己評価および他者評価いずれも、女兒の方が男児より高い項目を認めた。また、これまで幼児は自己評価が高いとされてきたが、男児においては、自己評価が他者評価より有意に低い過小評価を示す項目を認めた。さらに、他者評価の得点が最も高い場合における自己評価の得点を分析した結果、男女いずれも、他者が「とってもよくできる」と評価した項目について、自己評価では「とってもよくできる」と妥当な評価をする児のみではなく、「まあまあできる」「少しはできる」というような謙遜の反応を示す児が存在することが示された。

キーワード：幼児, 自己評価, 性差, 謙遜

## 1 緒言

これまで、幼児期の自己に関する研究として、幼児の自己知覚や自己判断と実際の能力や仲間との関係に関する検討が行われてきた。Harter ら<sup>1)</sup>は、Pictorial Scale for Perceived Competence and Social Acceptance for Young Children (以下 PSPCSA と表記) を作成し、絵を用いて指さしで応答する個人面接法を用いることにより、幼児であっても適切な反応を引き出すことを可能にした。本邦においては、桜井ら<sup>2)</sup>により、日本語版の「幼児の有能感と社会的受容感の測定尺度」が作成されている。

Harter ら<sup>1)</sup>や桜井ら<sup>2)</sup>のみでなく、これまで多くの研究で、客観的な指標と比較して、幼児は自己に対して肯定的な判断をすることが示されてきた<sup>3-5)</sup>。その要因として、Harter ら<sup>1)</sup>は、幼児は理想の自己イメージと現実の自己イメージとの間の区別があまり明確ではないと指摘しており、桜井ら<sup>2)</sup>は、幼児期は他児と客観的に比較される機会が少ないことや、比べる能力も未発達であるため、自分の能力を的確に把握することができず、自分自身が満足していれば「有能である」ということになると考察している。

しかし、幼児の高い自己評価は、児童期に低下することが明らかにされている<sup>6,7)</sup>。自己叙述における研究でも、年齢の増加に伴い、肯定的側面のみを描出するものが減少し、否定的側面を描出するものが増加するとされている<sup>8)</sup>。その背景には、他者との比較を通して自己に対する判断を行うようになるといった発達的变化の影響が考えられている。このような自分と他者を比較する社会的比較を通して自らを客観的に位置付けることが可能となる能力は、児童期以降に発達するとされてきたが、高田は<sup>9)</sup>、幼児の遊び場を観察し、5歳児であっても他児との遊びや相互作用の中で自己評価を行っていることを示している。また、渡辺ら<sup>10)</sup>も、5、6歳児でも社会的比較を行い、それに応じて自己評価の変動がみられると述べている。

これまで、PSPCSA を用いて幼児の自己知覚を測定した先行研究では、総得点を変数として、客観的な指標との比較や相関が検討されてきた。PSPCSA において、「できる」という自己に対する判断は、「とってもよくできる」もしくは「まあまあよくできる」のいずれかで反応が求められる。5、6歳になると、社会的比較を通じた自己に対する判断が可能になるのならば、例えば、客観的な指標が「とってもよくできる」の場合であっても、自分よりできる友人が存在する場合、友人と比較することで自己に対する判断が「まあまあできる」「少しはできる」と変化し、他者評価よりも自己評価が低くなる可能性が考えられる。しかし、「とってもよくできる」もしくは「まあまあよくできる」の反応を区別せず総得点を変数として検討した場

合、こうした自己評価が他者評価よりもわずかに低くなる発達的特徴を見出すことは困難である可能性が高い。このような客観的指標が「とってもよくできる」という場合における、他者評価より自己評価が低くなる反応の特徴に着目して分析することで、幼児の高い自己評価が児童期に向けてどのように変化していくのか、発達的变化を検討する手がかりを得ることができると考える。また、こうした自分の能力を控えめに評価する傾向は、謙遜を重んじるとされる我が国の文化が影響している可能性はないだろうか。そこで、本研究では、客観的指標が「とってもよくできる」という場合における、他者評価より自己評価が低くなる反応の特徴を、謙遜の反応として扱うこととした。

また、PSPCSA において、男児用と女児用の図版が作成されているが、Harter ら<sup>1)</sup>や桜井ら<sup>2)</sup>は、性差については特に言及していない。しかし、幼児期において、男児がより活発に遊び、女児は比較的静的な遊びをするというように、遊びには性差があることが示されており<sup>11)</sup>、性差に関する検討も必要であると考えられる。

したがって、本研究では、幼児期後期の5、6歳児を対象とし、PSPCSA に準拠して作成された桜井ら<sup>2)</sup>の「幼児の有能感と社会的受容感の測定尺度」を用いて、性差を考慮しながら、従来の総得点を変数として客観的な指標との関係を検討することに加え、客観的な指標が「とってもよくできる」という高い場合における自己に対する判断の特徴を分析することを目的とする。

## 2 方法

### 2.1 対象

地域の保育所または幼稚園に通う年長男児26名(平均年齢5歳9か月)と年長女児27名(平均年齢5歳9か月)を対象とした。また、自己評価と他者評価との関連を検討するため、他者評価の評定者として、担任保育者7名を対象とした。保育者より、日々の保育の中で特別な配慮が必要であると評価された児は除外した。また、療育を受けている児および療育歴のある児は除外した。

研究協力機関の責任者および保護者に対して、研究依頼書に基づいて口頭または文書で説明を行い、同意書の署名により同意を得て実施した。研究協力児に対しては、研究者が、研究協力児にわかりやすい言葉で研究の説明をし、研究参加の意向を確認した上で実施した。

本研究では、小島ら<sup>12)</sup>が収集したデータを用いて検討を行う<sup>13)</sup>。

小島ら<sup>12)</sup>の研究は、県立広島大学研究倫理委員会の承認を得て実施された(承認番号 第15MH010号)。

## 2.2 幼児の学習および運動能力に関する自己評価と他者評価の測定

### 2.2.1 材料

Harter & Pike (1984) の Pictorial Scale of Perceived Competence and Social Acceptance for Young Children<sup>1)</sup> の幼児用に準拠して作成された桜井と杉原の日本語版「幼児の有能感と社会的受容感の測定」<sup>2)</sup>を使用した。尺度は、学習面の有能感と運動面の有能感、仲間からの受容感と母親からの受容感という4つの下位尺度、各7項目から構成されている。本研究においても、小島ら<sup>12)</sup>と同様、自己に対する判断の領域は、比較的他者が判断しやすい質問内容であることを考慮して、幼児の身近な能力に限定し、学習面の有能感、運動面の有能感の各7項目、計14項目を自己評価の項目とした。

### 2.2.2 手続き

自己評価は、小島ら<sup>12)</sup>と同様の手続きで個別面接にて測定した。面接時に呈示する図版は、日本語版で使用されたものと同様の図版を使用した。図版は、絵を見たときに対象児が主人公に同一化しやすいように、主人公の性別のみが異なる男児版と女児版が作成されている。研究者は、「今日は、これからここにある絵を使ってゲームをしましょう。このゲームは『どっちの子がぼく(わたし)に似てるかな』というゲームです。これから○○ちゃん(対象児の名前)に絵の中の男(女)の子が何をしているかお話ししていきます。良く聞いていてくださいね。」という教示をした。まず練習項目を用いて練習した。「(対象児からみて右の絵を指し)こっちの男の子(女の子)は楽しそうです。(左の絵を指し)こっちの男の子(女の子)は悲しそうです。ではこの2人の男の子(女の子)のうちどちらの方があなたに似ていますか。私に教えて下さい。」という教示をし、対象児は指さしにて選択をした。対象児が自分の方からみて右の絵を選択した場合、研究者はその絵の下の方を指して、「(大きい方を指し)あなたはいつも楽しいですか、それとも(小さい方を指し)ときどき楽しいですか。」と尋ねた。対象児が左の絵を選択した場合は、その絵の下の方を指して、「(大きい方の方を指し)あなたはいつも悲しいですか。それとも(小さい方の方を指し)ときどき悲しいですか。」と尋ねた。項目の順序は、練習項目を2項目実施した後、学習面の項目と運動面の項目を計14項目実施した。各項目の図版には2つの絵が描かれ、各下位尺度内で、4枚は有能な子どもが右側に、残りは左側に描かれた。2つの絵のそれぞれの下に、行動の程度を大きさによって表現した大小2つの円が描かれた。対象児は最初に2つの絵のうち一方を選択し、次に選択した絵の下に描かれている大小2つの円のうち一方を選択した。対象児の回答は2回2件法による4段階評定とした。

他者評価は、保育者に、対象児の学習および運動能力について、対象児と同様の図版および質問項目で作成した質問紙への回答を依頼し、評定をしてもらった。保育者の回答は、幼児同様2回2件法による4段階評定とした。

幼児の学習および運動能力に関する自己評価と他者評価の得点は、先行研究<sup>1,2)</sup>に従い質問項目ごとに自己評価および他者評価の高い順に4, 3, 2, 1点として数値化し、下位尺度の学習面と運動面の得点は、4点×7項目=28点を満点とし、総得点は、4点×14項目=56点を満点として算出した。

客観的な指標が「とつてもよくできる」という高い場合における自己に対する判断の特徴を検討するため、質問項目ごとに他者評価が4点であった場合の自己評価について、他者評価同様4点の場合を妥当な反応、他者評価より低い3点以下の場合を謙遜の反応と定義した。

## 2.3 分析方法

自己評価および他者評価の得点について、男児と女児の比較を Mann-Whitney の U 検定を用いて行った。

男児と女児それぞれで、自己評価の得点と他者評価の得点の比較を Mann-Whitney の U 検定を用いて行った。

なお、男児と女児の2標本のデータのヒストグラムおよび Shapiro-Wilk 検定の結果、データが有意に正規性に従わない( $p < 0.05$ )と判断されたため、ノンパラメトリックな手法を適用した。

他者評価4に対する自己評価の反応が妥当か謙遜かについて、下位項目による自己評価の反応に違いがあるかどうかクロス集計表により検証を行った。また、下位項目ごとに男児と女児による自己評価の反応に違いがあるかどうかクロス集計表により検証を行った。クロス集計表は、Fisher の直接法または  $\chi^2$  独立性の検定を用いて比較した。なお、項目5については、他者評価4であった人数が少なく、分析から除外した。

統計解析には、SPSS Statistics-25 (IBM) を用い、有意水準は 0.05 とした。

## 3 結果

### 3.1 幼児の学習および運動能力に関する自己評価と他者評価

#### 3.1.1 下位尺度および総得点について

表1は、自己評価と他者評価の下位尺度および総得点を示したものである。

男児と女児の自己評価および他者評価の得点は、下位尺度28点の満点に対し中央値23-26の範囲、総得点54点の満点に対し中央値46.5-50の範囲であり、いずれも高い得点に偏っていた。自己評価および他者評

価の得点について、男児と女児を比較した結果、下位尺度の学習面と運動面、総得点いずれも有意差は認めなかった。男児と女児それぞれで、自己評価の得点と他者評価の得点を比較した結果、下位尺度の学習面と運動面、総得点いずれも有意差は認めなかった。

### 3.1.2 下位項目について

表2は、項目内容およびそれぞれの自己評価と他者評価の得点を示したものである。

自己評価の得点は、男児と女児いずれも14項目中11項目で中央値4を示しており、高い得点に偏っていた。自己評価の得点について男児と女児で比較した結果、3項目に有意差を認めた。その項目は、学習面における「絵を描くのが上手か」(男児<女児,  $p = 0.008$ )と「自分の名前をひらがなでかけるか」(男児<女児,  $p = 0.014$ )という2項目、運動面における「ブランコをこげるか」(男児<女児,  $p = 0.032$ )という1項目であった。

他者評価の得点は、男児は14項目中10項目、女児は14項目中11項目で中央値4を示しており、高い得点に偏っていた。他者評価の得点について男児と女児を比較した結果、3項目に有意差を認めた。その項目は、学習面における「絵を描くのが上手か」(男児<女児,  $p = 0.001$ )と「いろいろな曜日を言えるか」(男児<女児,  $p = 0.034$ )という2項目、運動面における「片足でけんけんするのが上手か」(男児<女児,  $p = 0.019$ )という1項目であった。

男児と女児それぞれで、自己評価の得点と他者評価の得点を比較した結果、男女いずれも運動面の2項目に有意差を認めた。その項目は、男児においては「ブランコをこげるか」(自己評価<他者評価,  $p = 0.046$ )と「紐を蝶結びにできるか」(自己評価>他者評価,  $p < 0.001$ )という2項目であった。女児においては「紐

を蝶結びにできるか」(自己評価>他者評価,  $p = 0.025$ )と「ボールを続けてつけるか」(自己評価>他者評価,  $p = 0.019$ )という2項目であった。

## 3.2 他者評価4に対する自己評価の反応

### 3.2.1 下位項目ごとの比較について

表3は、下位項目ごとに他者評価4に対する自己評価の反応が妥当か謙遜かという人数を集計したものである。「紐を蝶結びにできるか」の項目については、他者評価4である人数が少ないため、以降の分析から除外した。下位項目による自己評価の反応に違いがあるかどうか $\chi^2$ 独立性の検定を用いて比較した結果、人数の偏りは有意であった( $p < 0.001$ )。残差分析の結果、いずれも学習面の項目である「かるたをとれるか」という項目と「いろいろな曜日を言えるか」という項目は謙遜の反応が多かった。一方、「自分の名前を読めるか」という項目については、謙遜の反応は少なかった。全体として、妥当な反応は約70%、謙遜の反応は約30%であった。

### 3.2.2 性差について

表4は、下位項目ごとに男児と女児の他者評価4に対する自己評価の反応が妥当か謙遜かという人数を集計したものである。下位項目ごとに男児と女児による自己評価の反応に違いがあるかどうかFisherの直接法または $\chi^2$ 独立性の検定を用いて比較した結果、運動面における「ブランコをこげるか」という項目で人数の偏りが有意であった( $p = 0.048$ )。謙遜の反応は、男児は45.0%に対し、女児は15.8%であった。また、学習面における「自分の名前をひらがなでかけるか」という項目で人数の偏りが有意であった( $p = 0.031$ )。謙遜の反応は、男児は38.9%に対し、女児は9.1%であった。

表1 自己評価と他者評価の得点

		男児				女児				p値 <sup>注1</sup>
		中央値	最小-最大値	Percentile値		中央値	最小-最大値	Percentile値		
				25%tile	75%tile			25%tile	75%tile	
学習面	自己評価	26	12 - 28	22	27	25	21 - 28	24	27.5	0.460
	他者評価	25.5	17 - 28	22	27	26	20 - 28	24.5	28	0.126
	p値 <sup>注2</sup>		0.934				0.345			
運動面	自己評価	24	16 - 28	21.25	26.75	24	19 - 28	22	26	0.971
	他者評価	23	15 - 27	19	25.75	23	17 - 27	20	25	0.700
	p値 <sup>注2</sup>		0.162				0.198			
総得点	自己評価	49.5	30 - 56	44.25	53	49	41 - 56	46.5	53	0.681
	他者評価	46.5	33 - 55	42.25	52.5	50	39 - 55	45	52.5	0.288
	p値 <sup>注2</sup>		0.358				0.639			

注1：男児と女児の比較

注2：自己評価と他者評価の比較

表2 項目内容と自己評価と他者評価の得点

下位尺度/項目No.	項目内容	自己評価	男児				女児				p値 <sup>注1</sup>
			中央値	最小-最大値	Percentile値		中央値	最小-最大値	Percentile値		
					25%tile	75%tile			25%tile	75%tile	
学 習 面	1	パズルができるか	4	1 - 4	3	4	4	2 - 4	3	4	0.890
		他者評価	4	2 - 4	3	4	4	2 - 4	3	4	0.449
		p値 <sup>注2</sup>		0.773				0.793			
	3	絵を描くのが上手か	4	2 - 4	3	4	4	3 - 4	4	4	0.008**
		他者評価	3	1 - 4	2	4	4	2 - 4	3	4	0.001**
		p値 <sup>注2</sup>		0.081				0.180			
	6	数を数えるのが上手か	4	2 - 4	4	4	4	1 - 4	4	4	0.382
		他者評価	4	3 - 4	4	4	4	3 - 4	4	4	0.579
		p値 <sup>注2</sup>		0.152				0.970			
	8	かるたをとれるか	3	1 - 4	2.25	4	3	1 - 4	2	4	0.792
		他者評価	3.5	1 - 4	2	4	3	1 - 4	2.5	4	0.893
		p値 <sup>注2</sup>		0.607				0.395			
	9	自分の名前を読めるか	4	2 - 4	4	4	4	1 - 4	4	4	0.985
		他者評価	4	3 - 4	4	4	4	4 - 4	4	4	0.072
	p値 <sup>注2</sup>		0.681				0.153				
11	いろいろな曜日を言えるか	4	1 - 4	3	4	4	2 - 4	3	4	0.482	
	他者評価	4	2 - 4	3	4	4	3 - 4	4	4	0.034*	
	p値 <sup>注2</sup>		0.918				0.108				
13	自分の名前をひらがなでかけるか	4	1 - 4	3	4	4	2 - 4	4	4	0.014*	
	他者評価	4	1 - 4	3	4	4	3 - 4	4	4	0.231	
	p値 <sup>注2</sup>		0.560				0.492				
運 動 面	2	ブランコをこげるか	4	2 - 4	2	4	4	2 - 4	4	4	0.032*
		他者評価	4	1 - 4	4	4	4	3 - 4	3	4	0.659
		p値 <sup>注2</sup>		0.046*				0.508			
	4	ジャングルジムに登るのが上手か	4	2 - 4	4	4	4	1 - 4	3	4	0.214
		他者評価	4	1 - 4	3	4	4	2 - 4	3	4	0.831
		p値 <sup>注2</sup>		0.225				0.763			
	5	紐を蝶結びにできるか	2.5	1 - 4	2	3.75	2	1 - 4	2	3	0.949
		他者評価	1	1 - 3	1	2	2	1 - 4	1	2	0.080
		p値 <sup>注2</sup>		p<0.001**				0.025*			
	7	スキップが上手か	4	1 - 4	3	4	4	2 - 4	3.5	4	0.643
		他者評価	4	1 - 4	3	4	4	2 - 4	3.5	4	0.397
		p値 <sup>注2</sup>		0.642				0.937			
	10	片足でけんけんするのが上手か	4	3 - 4	3	4	4	3 - 4	4	4	0.305
		他者評価	4	3 - 4	3.25	4	4	3 - 4	4	4	0.019*
	p値 <sup>注2</sup>		0.762				0.086				
12	でんぐり返しができるか	4	2 - 4	4	4	4	2 - 4	4	4	0.942	
	他者評価	4	2 - 4	3	4	4	3 - 4	3	4	0.632	
	p値 <sup>注2</sup>		0.256				0.424				
14	ボールを続けてつけるか	3	1 - 4	2.25	4	3	1 - 4	2	4	0.734	
	他者評価	3	1 - 4	2	4	2	1 - 4	1	3	0.068	
	p値 <sup>注2</sup>		0.567				0.019*				

\*p<0.05, \*\*p<0.01

注1: 男児と女児の比較

注2: 自己評価と他者評価の比較

表3 他者評価の得点が4の際の自己評価の反応(人数と割合)

下位尺度/項目No.	項目内容	妥当	謙遜	合計
1	パズルができるか	26 ( 76.5 )	8 ( 23.5 )	34
3	絵を描くのが上手か	23 ( 85.2 )	4 ( 14.8 )	27
6	数を数えるのが上手か	44 ( 88.0 )	6 ( 12.0 )	50
8	かるたをとれるか	12 ( 46.2 )	14 ( 53.8 )	26
9	自分の名前を読めるか	46 ( 92.0 )	4 ( 8.0 )	50
11	いろいろな曜日を言えるか	23 ( 62.2 )	14 ( 37.8 )	37
13	自分の名前をひらがなでかけるか	31 ( 77.5 )	9 ( 22.5 )	40
2	ブランコをこげるか	27 ( 69.2 )	12 ( 30.8 )	39
4	ジャングルジムに登るのが上手か	30 ( 85.7 )	5 ( 14.3 )	35
5	紐を蝶結びにできるか	1 ( 33.3 )	2 ( 66.7 )	3
7	スキップが上手か	27 ( 73.0 )	10 ( 27.0 )	37
10	片足でけんけんするのが上手か	37 ( 82.2 )	8 ( 17.8 )	45
12	でんぐり返しができるか	27 ( 79.4 )	7 ( 20.6 )	34
14	ボールを続けてつけるか	11 ( 68.8 )	5 ( 31.3 )	16
	合計	365 ( 77.2 )	108 ( 22.8 )	473

注. 太字は、残渣分析で有意に多い、あるいは少ない項目を示す。( )内は%を示す。

表4 性差：他者評価の得点が4の際の自己評価の反応（人数と割合）

下位尺度／項目No.	項目内容		妥当	謙遜	合計
学 習 面	1 パズルができるか	男児	14 ( 77.8 )	4 ( 22.2 )	18
		女児	12 ( 75.0 )	4 ( 25.0 )	16
		合計	26 ( 76.5 )	8 ( 23.5 )	34
	3 絵を描くのが上手か	男児	6 ( 75.0 )	2 ( 25.0 )	8
		女児	17 ( 89.5 )	2 ( 10.5 )	19
		合計	23 ( 85.2 )	4 ( 14.8 )	27
	6 数を数えるのが上手か	男児	21 ( 84.0 )	4 ( 16.0 )	25
		女児	23 ( 92.0 )	2 ( 8.0 )	25
		合計	44 ( 88.0 )	6 ( 12.0 )	50
	8 かるたをとれるか	男児	6 ( 46.2 )	7 ( 53.8 )	13
		女児	6 ( 46.2 )	7 ( 53.8 )	13
		合計	12 ( 46.2 )	14 ( 53.8 )	26
9 自分の名前を読めるか	男児	21 ( 91.3 )	2 ( 8.7 )	23	
	女児	25 ( 92.6 )	2 ( 7.4 )	27	
	合計	46 ( 92.0 )	4 ( 8.0 )	50	
11 いろいろな曜日を言えるか	男児	10 ( 66.7 )	5 ( 33.3 )	15	
	女児	13 ( 59.1 )	9 ( 40.9 )	22	
	合計	23 ( 62.2 )	14 ( 37.8 )	37	
13 自分の名前をひらがなでかけるか	男児	11 ( 61.1 )	7 ( 38.9 )	18	
	女児	20 ( 90.9 )	2 ( 9.1 )	22	
	合計	31 ( 77.5 )	9 ( 22.5 )	40	
運 動 面	2 ブランコをこげるか	男児	11 ( 55.0 )	9 ( 45.0 )	20
		女児	16 ( 84.2 )	3 ( 15.8 )	19
		合計	27 ( 69.2 )	12 ( 30.8 )	39
	4 ジャンブルジムに登るのが上手か	男児	16 ( 94.1 )	1 ( 5.9 )	17
		女児	14 ( 77.8 )	4 ( 22.2 )	18
		合計	30 ( 85.7 )	5 ( 14.3 )	35
	5 紐を蝶結びにできるか	男児	0 ( 0.0 )	0 ( 0.0 )	0
		女児	1 ( 33.3 )	2 ( 66.7 )	3
		合計	1 ( 33.3 )	2 ( 66.7 )	3
	7 スキップが上手か	男児	13 ( 76.5 )	4 ( 23.5 )	17
		女児	14 ( 70.0 )	6 ( 30.0 )	20
		合計	27 ( 73.0 )	10 ( 27.0 )	37
	10 片足でけんけんするのが上手か	男児	16 ( 84.2 )	3 ( 15.8 )	19
		女児	21 ( 80.8 )	5 ( 19.2 )	26
合計		37 ( 82.2 )	8 ( 17.8 )	45	
12 でんぐり返しができるか	男児	12 ( 75.0 )	4 ( 25.0 )	16	
	女児	15 ( 83.3 )	3 ( 16.7 )	18	
	合計	27 ( 79.4 )	7 ( 20.6 )	34	
14 ボールを続けてつけるか	男児	7 ( 63.6 )	4 ( 36.4 )	11	
	女児	4 ( 80.0 )	1 ( 20.0 )	5	
	合計	11 ( 68.8 )	5 ( 31.3 )	16	

注. 太字は、Fisherの直接法または $\chi^2$ 独立性の検定の結果、有意に多い、あるいは少ない項目を示す。( )内は%を示す。

## 4 考察

### 4.1 幼児の学習および運動能力に関する自己評価と他者評価について

幼児の自己評価は、表1に示すように、従来の知見と同様、本研究においても男女いずれも得点分布は全体に高い得点に偏っていた。また、下位尺度および総得点を変数として自己評価と他者評価を比較した結果、男女いずれも有意差がみられなかったことから、幼児の自己評価はある程度実際の能力を反映している

と考えられた。しかし、他者評価が全体的に高い得点に偏っていたことから、桜井ら<sup>2)</sup>が指摘するように、年長児に対する質問項目としては質問内容の難易度が低かった可能性が考えられる。これまで、下位尺度および総得点を変数とした自己評価と他者評価の得点において、女児が高いとの指摘<sup>4,13)</sup>があったが、本研究では性差は認められなかった。しかし、表2に示すように、下位項目の自己評価と他者評価の得点においては、いずれも14項目中3項目に性差を認め、先行研究<sup>4,13)</sup>の結果と同様、全て女児が男児より高いという

結果であった。性差を認めた項目として、学習面の「絵を描くのが上手か」という項目は、自己評価および他者評価いずれも女兒が男児より高いという結果を示しており、また、学習面の「自分の名前をひらがなでかけるか」という項目についても、自己評価は女兒が男児より高い結果を示していた。この背景には、女兒の方が静的な遊びをするといった遊びの性差による影響<sup>11)</sup>が考えられ、女兒の方がお絵描きやお手紙などのやりとりを好む傾向にあることが要因の一つとして考えられた。他者評価について、これまで幼児期の運動能力に関して男児の方が女兒より日常での体験が多く、成績が良いと報告されてきた<sup>14,15)</sup>が、運動面の「片足でケンケンするのが上手か」という項目は、女兒が男児より高い傾向であった。運動能力の評価項目が異なるため単純な比較はできないが、吉田<sup>11)</sup>が、幼児期における運動能力の発達は、運動経験の違いによるものであることを示唆しているように、性差のみでなく運動経験の違いが影響している可能性が考えられた。

また、自己評価と他者評価の関連について、表1に示すように、下位尺度および総得点を変数として自己評価と他者評価の得点を比較した結果、性差は認められなかった。しかし、表2に示すように、下位項目においては、男児および女兒いずれも自己評価と他者評価の比較において14項目中2項目に有意差を認めた。その項目はいずれも運動面の項目であり、男児の1項目を除いては、自己評価が他者評価より有意に高い得点を示しており、幼児は自己に対する肯定的な判断をするというこれまでの知見を支持する結果であった。男女に共通した「紐を蝶結びにできるか」という項目については、他者評価の得点の中央値が男児は1、女兒は2と低く、また、女兒においては、「ボールを続けてつけるか」という項目も他者評価の得点の中央値が2と低かった。このように、他者評価が自己評価より有意に低いという関連から、やはり幼児期はできないことに対しても比較的肯定的に捉えていることが示された。一方、自己評価が他者評価より有意に低い得点を示した項目は、男児における「ブランコをこげるか」という項目であった。これは、幼児期においても内容によっては過小評価となる領域が存在する可能性を示していると考えられた。この背景として、活発な遊びを好む男児<sup>11)</sup>にとって、自身の中でより高く目標を設定していることや、自分より上手にできる他児との比較といった社会的比較を通じた自己に対する判断である可能性が示唆された。

## 4.2 他者評価4に対する自己評価の反応について

### 4.2.1 下位項目の比較について

表3に示すように、それぞれの下位項目で、本研究で着目した謙遜の反応は、学習面における「かるたをとれるか」と「いろいろな曜日を言えるか」という2

項目に多いことが示された。「かるたをとれるか」という項目は、14項目では唯一競争の要素が含まれており、他児との比較がより明確になると考えられた。また、「いろいろな曜日を言えるか」という項目については、曜日を正しく答えることが可能になるのは、6歳0か月時点で約半数と言われている<sup>16)</sup>。この項目に関しては、7個ある曜日をいくつ言えるかというように判断基準が数値で示されるため、本研究の対象児の年齢を考慮すると、言えるときと言えないときがあるという浮動的な状態を幼児自身が認識している可能性が考えられた。

一方、妥当な反応が多かった「自分の名前を読めるか」という項目については、5歳児健診<sup>17)</sup>の間診通過率が90%を超えており、判断基準としても読めるか読めないかが明確であるため、日常生活の中で幼児自身が認識しやすい項目であると考えられた。また、「自分の名前が読めるか」という項目と同様、53名中50名において他者評価4であった「数を数えるのが上手か」という項目では、人数の偏りがみられなかった。その要因として、いくつまで数えられると上手と言えるか、という判断基準が幼児によって異なる可能性が考えられた。

加えて、先行研究<sup>10)</sup>では、お絵描きの活動で、他児との能力比較と自己評価の間に関連がみられたとされていたが、本研究では「絵を描くのが上手か」という項目について、人数の偏りはみられなかった。その背景として、桜井ら<sup>2)</sup>も指摘するように、幼児期であれば例えどんな絵であっても賞賛されることが多いと予想され、養育環境などによる影響も考えられた。

下位項目全てにおいて謙遜の反応を示す幼児が存在することが明らかにされたが、全体を通して謙遜の反応は約30%であり、妥当な反応の方が約70%と多いことが示された。

### 4.2.2 下位項目ごとの男児と女兒の比較について

社会的比較に関する性差については、高田は<sup>9)</sup>、他児への関心は年齢とともに増大し、女兒に顕著であると示しているが、本研究では、表4に示すように、男児が女兒と比較して謙遜の反応をした者が妥当な反応をした者より有意に多い項目が2項目あると示された。その項目は運動面における「ブランコをこげるか」という項目と学習面における「自分の名前をひらがなでかけるか」という項目であった。その要因として、高田<sup>9)</sup>が、自他の競争は女兒より男児に多いと指摘しているように、本研究は主に能力についての自己評価を測定したため、男児に競争的な対比が目立ったということが一つの可能性として考えられる。ただし、この結果からのみで、5、6歳児における自己評価の謙遜の反応は女兒より男児にみられるということを示すことは難しい。遊びの嗜好、運動経験、養育環境など様々な要因を考慮する必要がある。

#### 4.3 今後の課題

本研究では、他者評価4に対する自己評価の反応について「なぜそう判断したか」という理由を尋ねていないため、その背景要因については今後検討の必要がある。さらに、今回は年長児のみを対象としたが、年中児との比較による横断的研究、また、年齢とともに能力は向上するが、社会的比較により自己評価が低下するといった関係を明らかにするためには縦断的研究が必要であると考えられる。

### 5 結論

本研究では、5, 6歳児における学習および運動能力に関する自己評価について検討した。下位尺度および総得点を変数とした比較では、性差は認められなかったが、下位項目を分析した結果、自己評価および他者評価いずれも女兒の方が男児より高い項目があることが示された。また、これまで、幼児は自己に対して肯定的な評価を行うとされてきたが、男児においては、自己評価が他者評価より低い過小評価を示す項目があることが示された。さらに、客観的な指標である他者評価が「とってもよくできる」という高い場合における自己に対する判断としての自己評価の特徴を分析した結果、5, 6歳になると、男女いずれも、自己評価が他者評価よりやや低い謙遜の反応を示す児が存在することが示された。

### 謝辞

本研究を行うにあたり、研究にご協力いただきました皆様、快く測定尺度の図版の使用を認めていただきました筑波大学人間系の桜井茂男教授に心より感謝申し上げます。

### 文献

- 1) Harter, S. and Pike, R.: The pictorial scale of perceived competence and social acceptance for young children. *Child Development*, 55: 1969-1982, 1984
- 2) 桜井茂男, 杉原一昭: 幼児の有能感と社会的受容感の測定. *教育心理学研究*, 33(3): 237-242, 1985
- 3) 金城洋子, 前原武子: 幼児における自己能力評価: 認知能力および教師評定との関係. *教育心理学研究*, 39(4): 400-408, 1991
- 4) 中澤潤, 泉井みずきほか: 幼児の有能感の認知と遂行との関連—幼児楽観性の視点から. *千葉大学教育学部研究紀要*, 57: 137-143, 2009

- 5) 眞榮城和美: 幼児期における精神的健康と自己有能感・社会的受容感との関連: 幼稚園教諭から見た子どもの精神的健康度. *清泉女学院大学人間学部研究紀要*, 10: 13-20, 2013
- 6) 桜井茂男: 認知されたコンピテンス測定尺度(日本語版)の作成. *教育心理学研究*, 31(3): 245-249, 1983
- 7) 藤崎眞知代: 幼児のコンピテンスの自己評価の正確さ: 他者評価との関連を通して. *群馬大学教育実践研究*, 13: 211-223, 1996
- 8) 佐久間-保崎 路子, 遠藤利彦ほか: 幼児期・児童期における自己理解の発達: 内容的側面と評価的側面に着目して. *発達心理学研究*, 11(3): 176-187, 2000
- 9) 高田利武: 日本人幼児の社会的比較: 行動観察による検討. *発達心理学研究*, 21(1): 36-45, 2010
- 10) 渡辺大介, 湯澤正通: 5, 6歳児における社会的比較と自己評価. *教育心理学研究*, 60(2): 117-126, 2012
- 11) 吉田伊津美: 園での遊びの性差と運動能力との関係. *福岡教育大学紀要 第4分冊 教職科編*, 54: 255-261, 2005
- 12) 小島理恵子, 玉井ふみ: 幼児期における自閉症スペクトラム障害児の自己評価: 「心の理論」との関連. *言語聴覚研究*, 14(1): 23-31, 2017
- 13) 眞榮城和美: 幼児期・児童期初期における自己知覚の発達と精神的健康との関連. *発達研究*, 25: 149-158, 2011
- 14) 田中千恵, 佐久間春夫: 幼児の運動能力の発達に関する研究: 一年齢および性別との関連について—. *身体教育医学研究*, 3(1): 15-20, 2002
- 15) 森田清美: 幼児の運動能力に関する一考察. *保健福祉学研究*, 17: 45-54, 2020
- 16) 外山浩美, 久野雅樹ほか: 質問-応答関係検査1検査の作成とノーマルデータ. *音声言語医学*, 35(4): 338-348, 1994
- 17) 厚生労働省: 軽度発達障害児に対する気づきと支援のマニュアル(第四章 健康診査ツール). 厚生労働省, (オンライン), 入手先 <[https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/boshi-hoken07/h7\\_04a.html](https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/boshi-hoken07/h7_04a.html)>, 参照(2020-8-6)

### 注

本研究で用いたデータは、小島(2017)のデータと一部(男児26名)重なっているが、さらに女兒(27名)を追加して使用した。



## **Self-evaluations of cognitive and physical competence by 5- and 6-year-old children, with a particular focus on gender differences and the evaluations of others**

Rieko KOBATAKE<sup>\*1</sup> Mayumi HORIE<sup>\*1</sup> Tadayuki IIDA<sup>\*2</sup> Fumi TAMAI<sup>\*3</sup>

\*1 Department of Communication Sciences and Disorders, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

\*2 Department of Physical Therapy, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

\*3 Developmental Support YUZU

Received 30 August 2020

Accepted 21 December 2020

### **Abstract**

The purpose of this study was to compare the self-evaluation of cognitive and physical competence in 5- and 6-year-old children with the evaluation by others with a focus on gender differences. The results indicated that there was no significant difference in the subscale scores of cognitive and physical competence and total scores. Certain items in the subscales showed a higher score in self-evaluation and evaluation by others for girls than for boys. While it is generally believed that young children tend to overestimate their abilities, this study shows that boys underestimated their abilities. In addition, in certain items some of participants rated themselves with a low score ( $\leq 3$ ) while others evaluated them with a higher score (4). We conclude that this underestimation indicates modesty in the participants.

**Key words:** young children, self-evaluation of competence, gender difference, modesty